



四
卷
七
陰
本
前
條
後

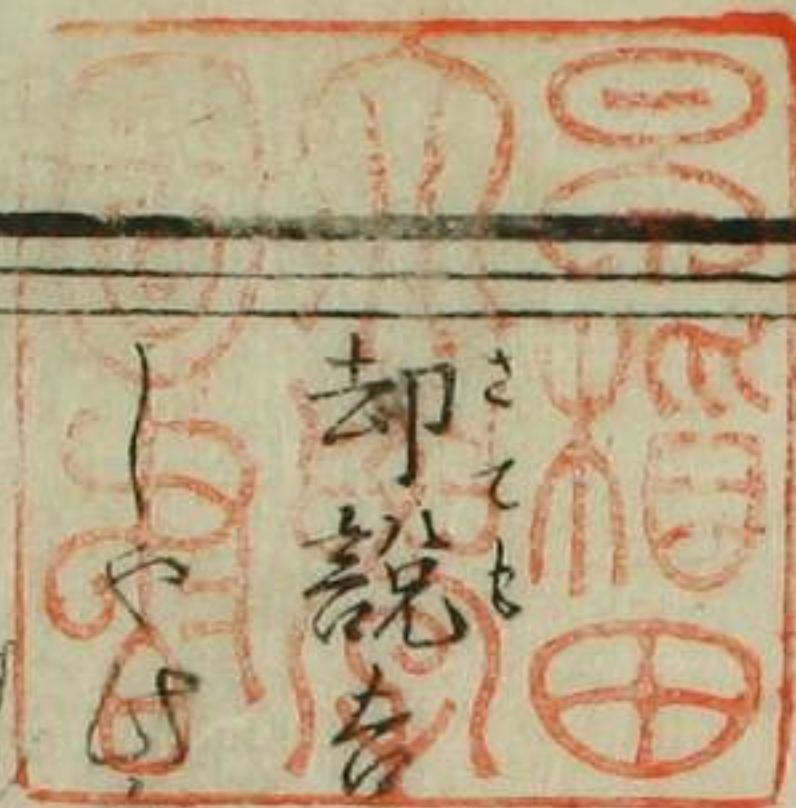
四

探
八
遠
3
960
4



本清

繪本胡蝶夢卷之四



安井家の士利倉十内を程後へ

沖屋氏を根籍十内小経を

却説

此も後くハ粟門もあゝぬる軀あゝる思の

衣小容姿をかかハ於七も又そのとを哀しいが

ま中者べかゝずと思維一抵假令の意中あり

雨の真雪其因かよしく姑殺つとりてぬる殆ど

言駒くぬる言其齒唇は泥一あゝ詩文お七ハ





隠へきし見深なるお果りし甘名は政お流波はせ
 たくおもふしつと通頃自在がましくと見右ヤ
 上りぞとく安井家相流の弟小田を在る其甚磨者
 三と田眼の弟よりくは受了成ひ弟より之
 且左少り成りおがと別幅の通り進獻仕らる之
 と稱くは音揚おび小田金千疋をくく
 一りらふも原末せ慈愿慈れ日峯上人の懇
 十内小田新り言葉了且別幅の言を辟く
 望ひらる安井氏の使第事新し望み
 のこま

此七のかみ柘又田源流をよどの名とくく
 憑く越さも給ひし事飯令おぬ得流をおが
 め一分らもての事おくずやさまがをくく小かきり
 ては他境の弟のようおふもおのい候とく頃日既予
 学問を長経新流通もあ情の事事との通小必予
 剃髪あさおめんとあひるにけしああもて言ふとて
 一りさん事おがく獲ひはまぐとそすは給ひ
 りらふは十内程も流を速りくりらる上人の流
 重くは由心去あけし猶子源流の息あつとく中こ入

小を者らうをとり候さんと為れば懐りもあはべ
 を何ぞ悪魔やんおお渡りありかたは身は能く
 事あり強く這着ゆやんけりてとてとと
 花と人又屋のりるは足も余る時におおあきしめたぬ
 時ハとり候さんといふ太くこぞ意はかごとく
 佛ありさうかかや何ぞん這着ハ法律と何のくはし
 くハさるへいと云ひらるふそ十内をこころをこ
 げといは是難もあしと人は通曉あるハ某偷めしと
 つもゆくとたうゆは闘争止むりしが率遠小使

課動さどが 和尚をせう 七内も自己トこ の闘争あうそん をやめんと
 勝かつ へ到いた 見えよハ油屋武あぶらやぶ を名を代物しろもの を和わ 拵し 将しょう
 外そと 校徒がうと 漢子わんし とをあひ。系き 武ぶ を名な ずけおせり
 方かた たり名な へ送りぬる名な を懐中くわうちゆう よりとりあし
 をとてが警せい 告こ を拵し 拵し 之の 嘔う 喚わん 罵ま りとて若冠わかつかむ 拘こ 偷と
 しくも儂のう 等ら の女房にようぼう お七しち を寄よ 殺ころ び流なが 流なが 我われ 暗くら 目め を掠さら
 曲まが 艶えん 冠かん 髪かみ 己おのれ 束たば の見み せし名な ありて廳やう 前まへ つまひ
 梟うしほ 首くび 不ふ 以い せんせん と自みづか 拳けん を固かた めんめん 撃うつ 手て 半はん 三さん 四し 十じゅう



十月 念々 油屋 武 在 撃 号



かゝるも深層の事ハ定りふり最にもある武を承け
 度への正所をのりあまともお七の心より武
 の野へゆく事ハお七の面親観る事さへ邪忌の又
 たとどの事あふいお世よあふといふくも脚へ嫁入の忌
 との事申す事々々那武を承けの事へゆく事へいふ事
 とりて申す事へお七の武を承けの事へゆく事へいふ事
 ても奈てもござりませぬ夫ゆへたとて言ふ事へ意愛が
 志と申す事へ奈事と武を承けの事へゆく事へいふ事
 女房ふもつとわらわらと理の事へゆく事へいふ事

お七が詞熱へかゝる武を承けが我漫醜女臆の切も
 る鄙賤婢女目ふを方見んと跳菟を透さす内
 扱をかあひ刀の鏝あくと武を承けが額をうつと
 籍と惣を承け長右左よりお七の心へゆく事へいふ事
 乃連業三人物しくお七の心へゆく事へいふ事
 撃撃一休等柝這吉三つを急的と思へた
 江戸の家の家老安井源次郎が息男油お七の
 の土鄙まるとして録の打擲命あますお七の
 お七を己が女房あると偽耳あると長そてり寺を見

此傳着乎人のあつたの所動き做ら首と胴との生り
 とも鬼神も挫ぐべし路は武を主と流しつゝにさ
 然るに此をせずお例も居らるが上人を主と流して
 毎長を拙記し酒生を候中くお取を做べきそのおあま
 今より長く師の流を流せぬやう膳を流すお還俗
 しく志小悪事を做す首筋振る門印へ定む又
 武を流す流を流し流の流を流すお悪心より悪人へ
 流めらば禍何れもこの世に十内どの不評しく助
 まへし流るをきつと嗜日流へともとも同く門印へ

愛おしむる武を流す流く破るこゝろあま我漫
 の流るる口四つりちしこく流る

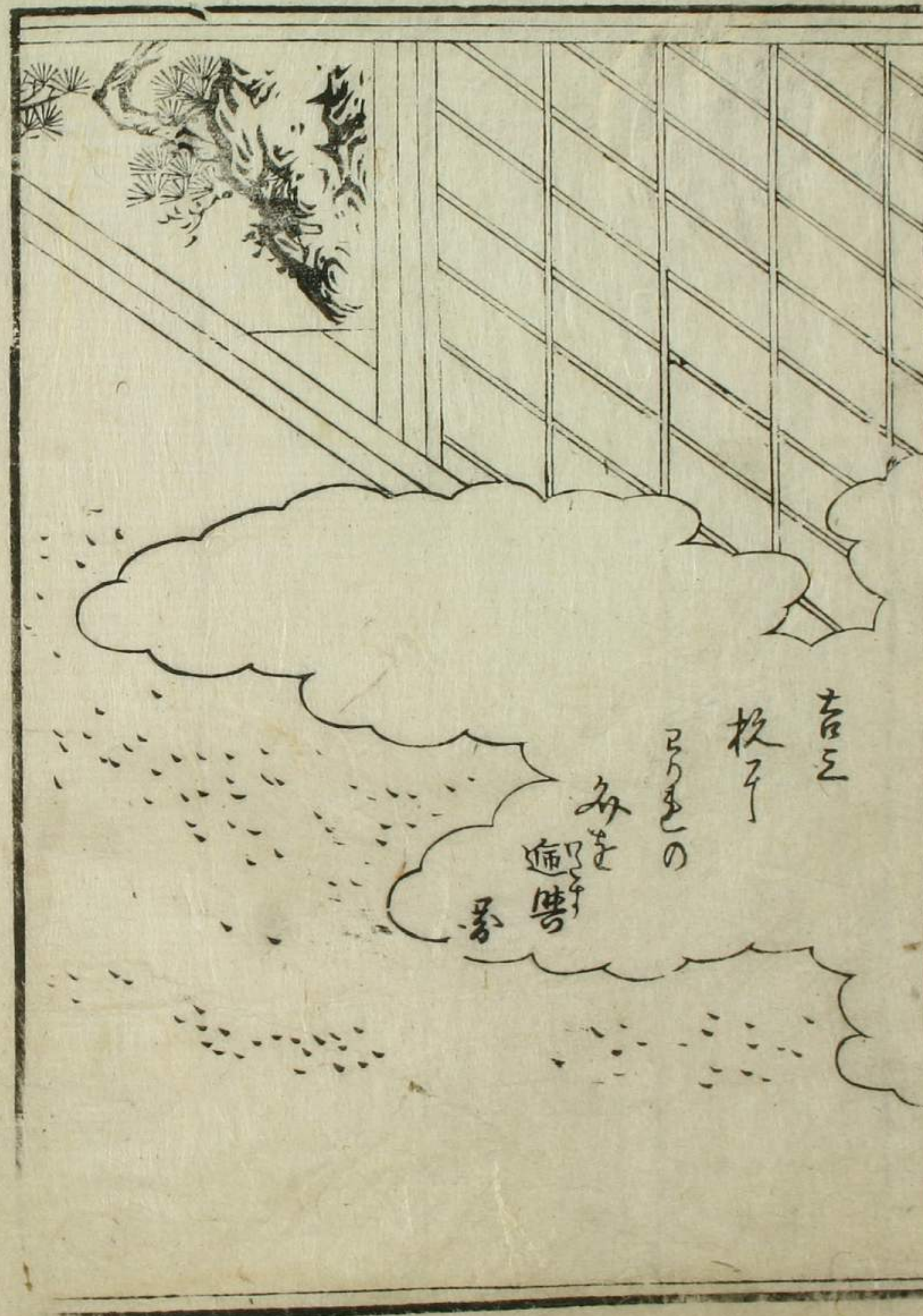
利倉十内を流るるか諫言

母とお取おせへ美見お流

日峯上人の過刻より寺中の課動世間の聞へを憚り流の
 只管心煩か居らるるが十内が一拳の働記とかい
 杖が流智のあすおあま武を流す主従ハ逃去りらるる
 片只納めをのい吉三つとお七が流の上人お十内
 吉三つの人を房裏へ招きと宣ひらるる武を流す一本の



巻四

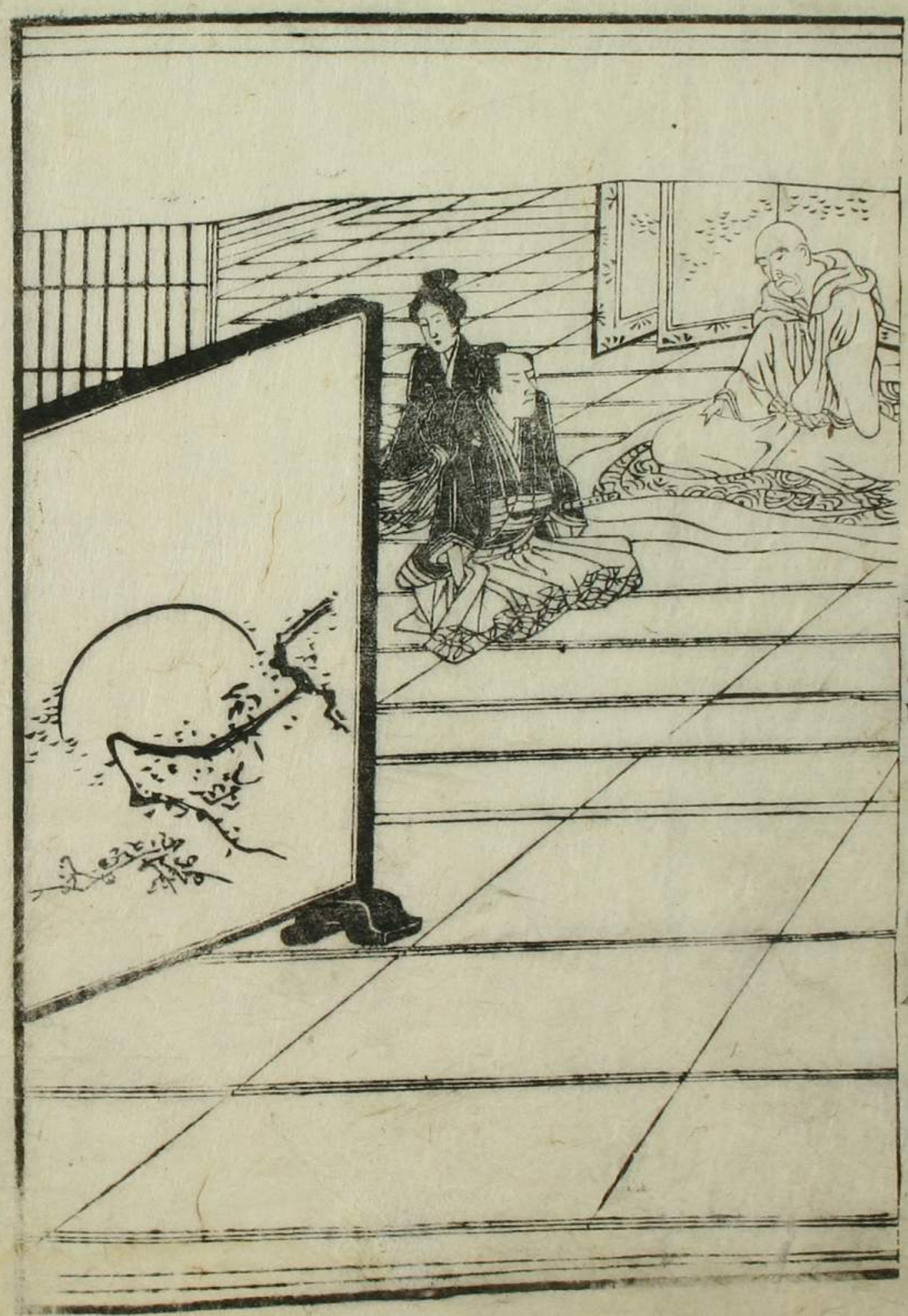
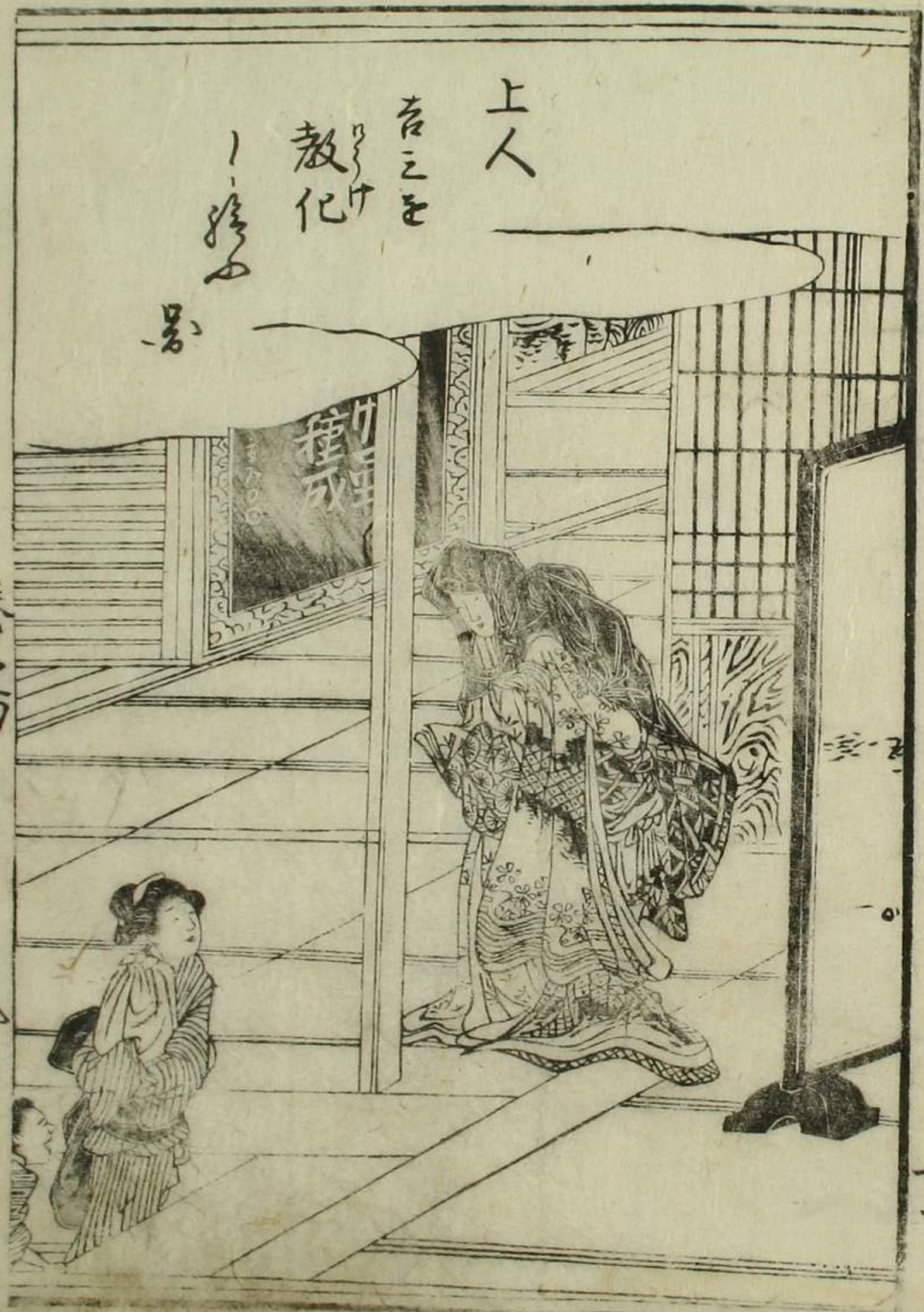


巻四

吉三
投子
弓色の
糸
通
芳

放蕩中より不慮と申七をうらぐ謔の度ぬまは
 是非あく明一詰りし中人に去頃八百や久き事矢火不
 法死に面陰へ應来りしが縁の河とあり八百や内内還
 留の中甚麼そあり方追難靚とはい痴ふ契約を
 あまとうの愚僧を見込んて驚きま一活法事どり
 自ら奈些道説有べきとありく見見も加ふとて七が退
 移ハてちとそその氣を身不暮かるものお惚て呆あや
 武と歌は金の借主も何もハ是罪お七ハ油屋へゆりおハあふ
 ころあふとこらとあふらりお七ハ生とハいぬとの凄凄

如鼠の軀不せも佛経讀誦ハ做すしとお七をとり成の
 上を日おのや煩ひと憶ハ安死用はし那の劫海
 小比翼の奥宵新と云ハ雌雄おあんと泳別人ふ
 共獲る時ハ必く共死を同らす又湖水不鴛鴦と
 いつる者あり雄死る時ハ雌その尸を抱く日を淫ばして
 共死せると知り畜類も類と愛慾深きもかか
 ころあふやと船十内との團えよりせろ方を
 小入へ一時のその様一さる事通一アとんとい
 おおとととと三思を遠くせハおよつと結腸を





お七
を
慕ふ
男

中にお手へあはるべきの容姿あははばりしよりしり
とあはる事と申せしりし上人にて有る事
りく種々八百屋久き部方へ人をきりて
入りしりしやいお七是を實ありとおひ
おとこのお七はうあはるき種々へゆく
いととお七はうあはるき種々へゆく
母と扱ひ多方にお終はしやと人の祈
どの小まわしとてい生てい居ぬと
たしおあはるき種々へゆく

お七を許しその上人様とてだんかあし
合點のゆくふあはるき種々へゆく
まあはるき種々と扱と二人が
とてあはるき種々と扱と二人が

繪本胡蝶夢卷之四 畢

